

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	佐野 智規
論文題目	近代日本における対抗的世界像の生成—菅野八郎・天理教・星野祭祀学のテキストを中心に—
<p><b>審査要旨</b></p> <p>本論文は、これまで民衆思想もしくは民衆宗教というジャンルに分類されてきたいくつかの周縁的なテキストに対して、一貫した方法論的読解を施すことにより、それらのテキストが描き出す特有の世界像を分節化するとともに、それによって差異化される近代的日常生活の構造そのものの逆照射を試みた意欲的な研究である。本論文で取り扱われる主題は、幕末維新期に活躍した百姓一揆の指導者であった菅野八郎の思想（第一章）、1900年前後に天理教をめぐって展開された論難と護教の応酬（第二章、第三章、第四章）、20世紀初頭から戦後期にいたる時期に展開された神道家星野輝興の祭祀学（第五章）であり、その年代もジャンルも多岐にわたっている。著者は、これら多様なテキストに共通してみられる「解釈困難」な特質に着目し、それらのテキストが提示する「謎」をていねいに拾い上げることで、これまでの研究史において、必ずしも十分な検討を与えられてこなかったそれらのテキストを、伝統的・民衆の世界像と合理化・近代化が進展する日常生活との接触領域として解読することを試みた。本論文を通じて著者は、「解釈困難」なテキストの解釈というユニークな方法により、進展する近代化との摩擦を通じて明らかとなる民衆のコスモロジーの存在と特質、ならびに国民国家、資本主義、植民地主義といった近代固有の要素によってもたらされるその変容の諸相をうきぼりにすることに成功した。</p> <p>本論文の主たる学術的貢献としては、テキスト論や物語論や記号論などの分野において活発に議論されてきた歴史叙述に関する理論的・方法論的考察を、民衆思想史のジャンルに属するテキストの具体的な解釈を通じて展開することにより、民衆思想史の新しい探求と叙述の可能性を開いたことがあげられる。著者は、いわゆる言語論的転回以後のテキスト論の方法論的特徴を、反-意図主義、反-作者還元主義に求める一方で、民衆思想史という研究分野の特質を、「主体（性）の構築」という主題への固着に見いだしている。従来おこなわれてきたテキスト論的立場からの民衆思想史批判は、たしかに一方で、主体形成の物語へと還元されない新しい歴史叙述の可能性を示唆するものではあった。しかし他方で、そうした批判が、もっぱら理論的・抽象的考察に偏るあまり、テキストそのものの分析が看過される傾向を伴いがちであったこともまた事実であった。テキスト論と民衆思想史の節合は、現在においてもなお重要な理論的挑戦として存在する。本論文のユニークな学術的貢献は、こうした問いに対して、あえてテキストそのものへ回帰するというオーソドックスな方法を徹底して貫くことで、その理論的突破を試みた点にある。</p> <p>本論文の理論的貢献は、テキストの「解釈困難さ」を徹底して問題化し、その解決のための新たな方向性を提示したことである。本論文を通じて問題化されるのは、テキストの「解釈困難」な特定の箇所を黙殺するような解釈方法であり、著者はそれを「内在主義的方法」として主題化している。それは、テキストの中で解釈可能な箇所に遭遇した際、まずテキストを解釈可能な部分とそうでない部分とに弁別し、つぎに読み手の能力・技術の不足をテキストの書き手の能力的・技術的未熟さへと転嫁し、さらに解釈できない空隙を、読み手の心理主義的憶測や倫理道德などの規範などによって補填してしまうような解釈方法を意味している。著者は、こうした「内在主義的方法」が、まず書き手について熟知すれば書き手の書いたテキストの意味を決定でき、つぎにテキストの意味の全体性が、テキストの書き手という場において意味のある像を結んでおり、さらにテキストの読み手と、テキストの書き手が共感可能な人間的能力を共有しているという前提に立脚するものであることを主張する。著者によれば、こうした諸前提は、それ自身を歴史テキストから内在的に導くことができない外在的な価値判断であり、方法論的批判に耐えうるものではない。こうした「内在主義的方法」にかわり、筆者自身が提示する解釈の方法論的原則は、「テキストを運動としてとらえ、運動として分析すること」である。それはたとえば、駄洒落や地口にみられるような音韻の類似性によって事物を接合していくテキストの操作や、当該のテキストにおいて過剰に登場する「愚」や「慈悲」または「境界」といった諸概念の反復、さらには一見して二元論を構成するかに見える「智」と「愚」のような対抗的な諸概念のあいだに生まれる不均等な関係性に注目することによって、テキストが依拠する世界像を動的に</p>	

把握することを意味している。みずからの解釈操作の原則を、テキストの解釈困難さに対する原理的考察から導出する著者の方法論的考察は、明晰かつ新鮮であり、民衆思想史をはじめとする歴史叙述一般の方法論的議論に対し、重要な貢献をなすものとして評価しうる。

本論文の民衆思想史に対する貢献は、こうした解釈操作の原則を、菅野八郎、天理教、星野輝興のテキストの読解に適用することにより、テキストの個別的解釈とそれらのテキストによって織りなされる総体的解釈の双方において、これまでの研究とは異なる新しい論点を提示した点に求められる。第一章において著者は、菅野八郎のテキストに頻出する「愚」という概念の意味変容を分析することを通じて、「資本主義につねに敗北を強いられつつも、その足下にまとわりつき、その必然的な没落のときが来るのを待ち続けている」前近代的なコスモロジー、すなわち「鈍愚の潜勢力」の持続性を明らみに出す。つぎに著者は、第二章から第四章にかけて展開される天理教をめぐる考察において、その教義と運動を批判する外部のテキスト群の分析を通じては啓蒙という実践の根源的不可能性を、その正統性の確立をはかる内部の教祖伝の分析を通じては、民衆的世界像と植民地主義との共振現象を、それぞれうきぼりにしてみせた。さらに著者は、第五章において、星野輝興の祭祀学を論じた種々のテキストを特徴づける「絶えざる境界線の明確化」という「フラクタル的な体系性」に焦点を合わせることで、そのテキストが逆説的に浮かび上がらせる日本における「革命」とその戦後改革との関連を主題化した。こうした著者の分析は、それぞれのテキストに対する新しい解釈を提示したものであり、それ自体として貴重な学術的貢献として評価しうる。しかしそれ以上に興味深いのは、著者がうきぼりにした個々別々のテキストの「運動」のあいだに、ある種の収斂が認められるという事実である。本論文で論じられた時代も主題も多様なテキストの「運動」に、一定の方向性が認められるとすれば、それはそれらのテキストに作用している共通の圧力の存在を告げるものである。著者は、その圧力を、国民国家、資本主義、植民地といった近代化の作用として問題化しており、その結果、本論文は、幕末維新期から昭和戦前期にかけて進行した近代化の思想史の意味を、民衆的世界像の変容を通じて明らかにするモノグラフとしての性格を備えるにいたっている。本論文の学術的貢献は、ユニークな方法と対象を用いて、日本における近代化の構造とその変容を明らかにした点に認められるべきであろう。

以上本論文が、理論的にも方法的にも、従来の研究の水準をこえる内容を豊富に含み、オリジナリティにあふれた意欲的研究であることは疑いえない。しかしながら、研究のさらなる進展を期待する立場から、いくつかの要望を提示することは可能である。その第一は、先行研究の乏しいテキストに分析を集中するあまり、これまでオーソドックスと見なされてきたテキストの分析が後景に退いてしまったことである。たとえば、従来の天理教の教団形成史において、中心的な分析の対象となってきたのは、『おふでさき』、『みかぐらうた』、『おさしづ』といった教祖中山みきや、みきを継承した飯降伊蔵の「生の声」を拾ったとされる経典であった。それに対し本論文は、そうした「原典」の分析を迂回し、もっぱら種々の教祖伝にあらわれたみきをめぐる様々なエピソードのなかに、天理教をめぐる危機とその解決の方向を読み取ろうとしている。単に周縁的なテキストだけでなく、これまで様々に論じられてきたオーソドックスなテキストに対しても、本論文で提示された解釈操作に従って新たな解釈を導出する努力が求められる。第二は、本論文の分析が、テキストの言語操作のレベルに限定されており、テキストの物質性にかかわる多様な次元を十分に問題化できていない点である。たとえば、本論文が対象とした菅野八郎の地口や天理教の経典、さらには星野輝興の印刷論文は、それぞれ近代における「声の文化」から「文字の文化」への大きな変容の重要な局面を象徴する。それはまた、それぞれのテキストが、どのように生産され、そのように流通し、またどのように読まれたのかという物質的な次元と密接な関係を有している。こうした「テキストの物質性」への着目と分析は、本論文を通じておこなわれた日本の近代化の構造とその変容をめぐる分析に、さらなる広がりや深みを加えることにある。

本論文は、このように、改善のための具体的課題をいくつか残しているとはいえ、それらはけっして論文全体の学術的意義を損なうものではない。本論文を、民衆思想史研究と歴史学方法論の分野を横断する重要な学術的貢献をなすものと認め、博士（文学）学位を授与するにふさわしい研究であることを認定する。

氏名

公開審査会開催日	2013年 3月 26日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学・教授	PhD(シカゴ大)	梅森 直之
審査委員	早稲田大学・教授		宗像 和重
審査委員	一橋大学・名誉教授		安丸 良夫
審査委員			
審査委員			